

「驚異の火球」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター 研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

流星(流れ星)の中でも、特に明るいものを「火球」(かきゅう)という。通常の流星は、彗星の尾の物質がもとになることが多い。しかし稀に小惑星のかけら---直径 5cm を超えるもの、時には直径数十 cm クラスのもの---が大気圏に飛び込んでくることがある。



浅間山の火球 2015/12/19 18h 07' 54"

このような火球はごく稀にしか飛ばないが、時には満月と同じぐらいの明るさになったり、燃え尽きずに地上に達し「隕石」として実体が採取されることもある。近年では「習志野隕石」が有名だ。

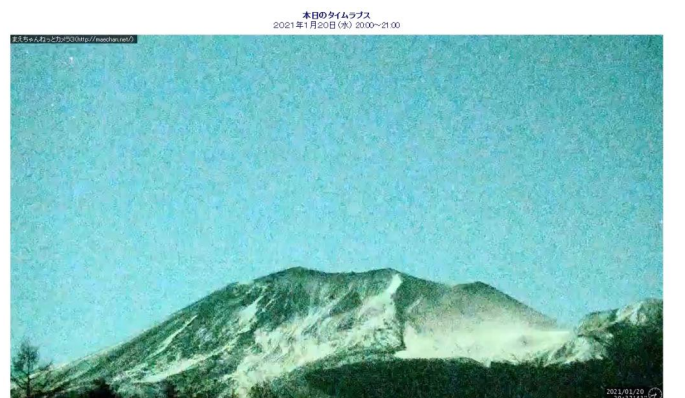


2020_0701_02h32m07s

このような火球は、防犯カメラ、ドライブレコーダー、火山観測カメラなどで、広範囲にとらえられることが多い。上の写真は、当方山荘の定点カメラがとらえた火球落下の一瞬である。



1月20日の20:30過ぎ、関西から関東にかけての広範囲で、火球が目撃・撮影された。左下の画像と同じカメラに写っていることを期待したが、火球本体は写っていないかった。しかし、火球が放った「閃光」によって樹木の影が形成される様子をとらえていた。上の写真が火球の一瞬、下はその数秒後である。



浅間山監視カメラもその「閃光」をとらえていた。高感度カメラの1コマだけ、空が昼のように明るく写っていた。直径 10cm 程度の小惑星のかけらが、大阪から群馬まで、一瞬ではあるが、空や地上を月夜のように明るく照らすのだから、その光のエネルギーは凄まじい。まさに「驚異の火球」である。